

膳所小学校インタビュー：「小学生エコライフデー2017」参加の生徒さんに聞く

2017年の大津市エコライフデーは、7月21日を中心に、多くの市民の皆様が1日エコを心がけた生活にチャレンジしていただきました。夏休みを利用して市内6校の小学4年生には「小学生版」を配布し、計1,266人（家族を含む）に取り組んでいただきました。

12月19日（火）、その中から膳所小学校を訪問し昼休みの時間に6人の生徒さんにインタビューしました。

★エコライフデーで取り組んだチェックシート15項目のうち、特に関心が高かったのはどの項目ですか。

☆Aさん「お風呂はさめないうちに、家族みんなが入る」「レジ袋をもらわない」

B君「見ていないときはテレビを消す」「使っていない部屋のあかりは消す」

Cさん「ごはんやおかずを残さず食べる」「近くへは車を使わず歩いたり自転車で」

D君「温水洗浄便座は切る、温度を低く、使わないときはフタを」「お湯や水は流しっぱなしにしない」

Eさん「野菜は季節のものや近くでつくったものを食べる」「レジ袋をもらわない」

F君「ごはんやおかずを残さず食べる」「だれも見ていないときはテレビを消す」

★皆さんのお答えは、さまざまですね。いろんなことに気をつけてエコライフデーに取り組んでもらったことが分かります。ところで関心が薄い項目についてお聞きします。「いつもより1時間早くねる」「主電源を切る、プラグをぬく」はどうですか。

☆早寝早起きは良いことだけど、早くねるのはたいへん。毎日していることをエコライフデーに限定して1時間も早く終わることはむずかしかったです。テレビも見たいし…。

☆プラグは抜くように心がけましたが、主電源を切るところまではできませんでした。

★全学校の集計結果でも「1時間早くねた」のは約25%、「主電源を切る」は約50%で、実行がむずかしかったようです。エコライフデーの後、家庭で何か変わったことは？

☆家族みんながいない電気を消すようになった。テレビも見ないときは消している。お湯や水をもっと大切に使うように気をつけるようになった。

☆ペットボトルやごみを分けると、資源になると考えるようになった。使い終わったペットボトルは、あらってもう一度使う。

☆台所の洗剤を使いすぎないようにした。

☆できていないことがちょっと多いと思った。もう少し地球のことを考えるようにしたい。

☆こんなに二酸化炭素を出しているのだと思うようになった。

★これからの毎日の生活で、地球温暖化のことを考えて、実行していこうと思うことは何ですか。

☆ごはんやおかずを残さずに食べることです。残すのは「もったいない」。エネルギーのむだになります。

☆家族ができるだけいっしょの部屋ですごすようにすることです。それによって使っていない部屋の灯りを消します。テレビや冷暖房もむだに使わなくて済みます。また家族でいろいろ話ができます。いっしょにすることで、たくさんのエネルギーがへらせることをはじめて知りました。

☆レジ袋をもらわないですむように家から持っていくようにしています。

☆少しのきよりは自転車や歩いていくようにしています。車を使わず、二酸化炭素を出さないようにする。環境のほかにも、駐車場をさがす時間や駐車料金もいりません。

☆3人家族ですがお風呂は続けて入るようにしています。帰りの遅いお父さんはあとからですが…。お風呂にふたをしてなるべくさめないようにする。

★いまは暖房の季節ですが、冷房・暖房の温度設定（冷房28℃以上、暖房20℃以下）は守れますか。

☆暑すぎたり寒すぎたりすると健康にも良くないと思うので、気をつけながらなるべく守りたいです。

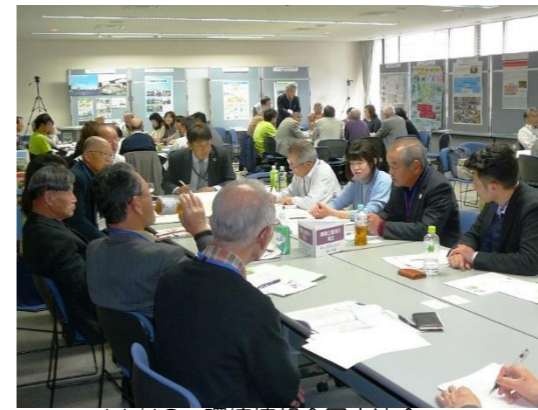
★「野菜は季節のもの、近くで作ったものを食べる」ようにしていますか。

☆野菜スープなどは冷たいと体温を下げるし、温かいものは体を温めてくれます。冷・暖房とも関係してきます。冬にはできるだけ地元の季節の野菜を使った温かい料理を食べるようにできればよいと思います。

★今回のエコライフデーは、むずかしかったという感想もありましたが、少し気をつけるだけで多くの二酸化炭素が減らせることを学んでいただけたと思います。エコライフデーの1日だけではなく、毎日の生活の中で環境のことを考え、むだなエネルギーを使わないように心がける「エコライフ」に挑戦し、地球温暖化を防止するように努めてください。ありがとうございました。



左から脇本得成さん、川崎瑞姫さん、古市稜さん、菅美空さん、小倉千英さん、仲田弘人さん



11/18、環境情報合同交流会

環境情報合同交流会2017 基調講演「琵琶湖と地球の環境をどう保全するか」要旨

琵琶湖と地球環境のつながりについて、おそらく地球環境の変動が琵琶湖に何らかの影響を与えていると言えそうですが、実のところまだよく分かっていないことが多いので、今後の更なる研究に期待するところです。

琵琶湖を汚したり影響を与えているのは滋賀県に暮らす人たちの生活や生産活動なので、滋賀の社会が健全にならなければ琵琶湖が健全になるわけではないのです。そして琵琶湖に良い社会をつくることは、地球に良い社会をつくることと同じなのです。

滋賀はSDGs※1を推進しており、SDGsは幅広い目標を掲げていますが、持続可能な社会の実現を目指すもので、困難ではあっても、それ以外に琵琶湖や地球が助かる道はないと思います。

例えば琵琶湖では在来魚が獲れなくなって外来魚が増えています。その原因は十分には分かりませんが、地球温暖化が滋賀の気温に影響し、長い目でみると琵琶湖の水温が上昇している。そして酸素濃度が下がっていく。また琵琶湖の深呼吸※2が起りにくくなっている。こうして起きる低酸素状態は生態系にとって「まずい」ことです。地球全体でいえば記録的な暑い夏が近年続いています。議論のあることは承知ですが、これらの現象は、温室効果ガスが蓄積されて温暖化が進んでいるためなのは間違いありません。

注目したいのはその原因で、1人あたりのエネルギー消費量が増え、人口も増えているので、掛け算すると膨大なエネルギー消費の増加になっています。そんなにまでして、経済を成長させエネルギー消費を増やしていかなければ人類はダメなのか。地球は頑張っていると思いますが、どこまでもってくれるのかが一番肝心なところだと思います。石油の上に乗っかって豊かさを追い求めてきた結果、GDPは増加したけれども前世紀後半からの二世代ほどの間に多くの資源を食いつぶし、地球を痛めてきたわけですね。だから持続可能な社会をつくるには、化石燃料を使わない、温暖化を進めない、そういう社会をつくるという覚悟が必要なのです。SDGsは温暖化や生態系だけではなく格差など世界を不安定にしている問題について、総合的に解決していこうということですから、経済や生活のあり方を思い切り変えていく覚悟がどうしても必要です。

経済学でいうコモンスの悲劇、つまり多くの者が共有資源をみだりに奪い合って、資源枯渇を招いてしまう、これが今の地球環境です。三陸のカキ養殖ですが大津波が来てイカダが壊れてしまったけれども、その結果、イカダの数が減って新たにスタートした養殖業がうまくいくようになったという話があります。持続可能な社会とは、今の我々のニーズと将来のニーズをちゃんと保障することなので、経済と環境のウインウインの関係をどうバランスしていくかが大切で、SDGsは「誰も置き去りにしない」という高邁な理念ですから、地球環境にとどまらず地球上の生命体全部の問題、世界の社会経済のしくみをどうしていくかという大きな問題です。

世の中、脱炭素社会ということで動いていますが、その実現は、簡単な問題ではありません。温暖化防止も大切ですが、今や進んでいく温暖化にどう適応していくのか、まじめに取り組む時期が来たと思います。自分たちだけで生き残る社会・滋賀をつくろうと真剣に考える時が来たのかも知れません。

※1 SDGs(Sustainable Development Goals)とは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットで構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。

※2 琵琶湖で表層の水と湖底の水が完全に混ざり合う現象（全循環という）で、通常、年一回冬に起こる。



講師：内藤正明先生
琵琶湖環境科学研究センター長
京都大学名誉教授

環境情報合同交流会2017 テーマ別ディスカッションのまとめ

基調講演に引続き実施した4つのテーマ別ディスカッションで出された意見からのまとめです。

【びわ湖を守る】参加者13名（案内人：滋賀大学名誉教授 川嶋宗継さん）

①びわ湖の良さ（価値）として

- ・水資源、生物の生息場所、食材、風光・レジャー、文化・人の提供元
- ・びわ湖の固有種、ヨシ、琵琶湖博物館、びわ湖への愛着、沖島、独特の食文化等

②問題点として

- ・水の汚染、湖底のヘドロ、外来生物の繁殖、公共事業による悪影響、県民の関心の低下等

③何が必要か？

- ・びわ湖への影響が議論されないまま人が行ってきた行為を改めないといけない。
- ・外来魚のブラックバスやブルーギルはリリース禁止となっているがほとんどの釣り人はリリースしている。
- ・「オオバナミズキンバイ」も綺麗な花が咲いていると思っている人がいる。中途半端に刈り取ると逆に増殖する恐れがあるとも言われている。
- ・行政と県民が一緒に対応することが必要。例えば水草の除去にしても機械でしかできない所は行政が、人手でしかできない所は県民・市民がといった役割分担。
- ・びわ湖と人を繋ぐ、びわ湖の魚や貝をもっと食べるという食文化を県民が共有する。「びわ湖弁当」や「ペットフード」などを開発し広めるのも一案。その為にも行政から支援が必要。



【食品ロスの減少】参加者14名（案内人：おごと温泉観光協会副会長 佐藤祐子さん）

日本の食品ロス（食べられるのに捨てられてしまう食品）全体のうち約半分を占める家庭からの排出量（約300万トン）を削減することを重点に次の点について議論した。

① 買い方・食べ方

（まとめ）買いすぎを防ぐために、事前にメニューを決める（例えば1週間分）準備が必要。買ったものはすべて使い切る。余ったものも他の食品に加工するか、冷凍保存する。買い物へ行くタイミングはお腹が満腹感になっている時がよい。

② 活用法

（まとめ）作り過ぎず、残ったものも翌日に食べきる。捨てていた部位もエコな調理方法で学んで使用する。供給側も残った分を、そのまま捨てるのではなく活用するシステムを作る。

③ 賞味と消費期限

（まとめ）両者を混同している例が多い。使い切る自信があるなら消費期限が短くても買って帰る努力をする。味に関係なく本当に食べられなくなる期限を明示して欲しい。

④ 持帰り

（まとめ）もったいないからドギーバッグ（持帰り容器）大賛成。マイドギーバッグ（タッパウエア）を持参してレストランへ行く習慣をつける。主食サイズを選べるように。シルバーランチや小食ランチをメニューに加える。

⑤ 教育

（まとめ）食に感謝の気持ちを醸成する。命をいただくことのありがたさを知る。親がもったいない運動の見本を見せる。環境イベントで食品ロスの啓発も実施する。

⑥ 責任その他

（まとめ）買いすぎない、作りすぎない、食べきる、の責任を家庭も食品提供者も心して見直してみる。消費者がSNSを活用して企業とコラボする。消費期限が迫っているものの安売りなどの方法で食品ロスを出さない。どうしても消費できないものを上手にリサイクルする。

【気候変動の影響への適応】参加者13名（案内人：滋賀県温暖化対策課主任主事 竹内雅美さん）

身の回りで起こっている気候変動の影響と思われる事象と対応策について、農林水産・自然生態・自然災害・健康・経済ビジネスに分類し、まず影響について、次いで対応策について議論した。

① 影響

- ・温暖化で農作物の不作が出ている。
- ・猪や鹿が里へ下りてきて、農林業に被害が出ている。
- ・クリスマス近くまで紅葉しているなどの影響が出ている。
- ・自然災害では大雨や台風など今までは何十年に一度というような現象が頻繁に起きる様になっている。
- ・健康面では、熱中症の患者が増えている。特に高齢者では死亡が増えている。
- ・ビジネス面では冬物が売れなくなっている。スケートリンクが少なくなっている。



② 適応策

- ・農作物では、気候変動に適応する作物への転換（稲の開発など）が必要である。
- ・自然生態系では、調査、モニタリングを続けることが必要で、長期的な傾向を把握する。
- ・自然災害に対しては、常に防災に備える必要がある。コンパクトタウンなども一つの方法である。
- ・健康面では、高齢者の死亡率が上昇するということを踏まえて、コミュニティハウスで共住するなどの方法も

考えられる。共住するとエアコンも節約できるので緩和策（温暖化防止）にもなる。

- ・ビジネス面ではクールビズなどの製品の普及が考えられる。

（まとめ）滋賀県が進めている適応策として「夏の暑さに強いお米『みずかがみ』を開発し、人命を守る流域治水として“ながす”“ためる”“そなえる”“とどめる”の四つの対策を進めている。温暖化に備えて個人で出来る適応策もあるので、水害や熱中症や感染症への対策などを行なってほしい」

【環境と経済の両立】参加者12名（案内人：大阪ガス株式会社滋賀地区副支配人 嶽釜信一さん）

- ・廃棄物は循環するようにすること、廃棄物の処理にお金がかかるが循環によってお金がかからない社会をつくる。
- ・省エネ診断を通して、企業のコスト削減、蛍光灯をLEDに変えるだけで電気代が1/3に。
- ・湖東ではゼロエミ研究会や排出企業と処理企業のリサイクルネットワークにより廃棄物を有価物に転換し、ゼロエミッション（廃棄物ゼロ）を目指す。
- ・田んぼに魚を生息させることにより、環境にやさしい米（魚のゆりかご水田米）と酒を生産するような持続可能な取組みをする。
- ・しじみや魚の漁獲減に対して増やす方法を検討。
- ・環境を取るか経済を取るかの議論でなく、環境対策で経済発展を。環境に配慮しつつ経済が成り立つか勉強したい。将来どのような経済社会を描くのか、環境も踏まえた経済をどうするのかが大切。
- ・「三方よし」をさらに具体化してグリーン経済を目指す。
- ・環境と経済の両立のために消費者の力が大切、消費者の立場から環境配慮の品物を求めること。
- ・初期投資が障害になっている。省エネを進めるために市民を巻き込めないか。「市民ファンド」等活用。



（まとめ）環境と経済の両立のためには1社・1団体・1個人だけでは非常に難しく、いろんなネットワーク、共同体を利用することが必要。例えば環境配慮の農作物をネットワークを生かして広げていくとか、ゼロエミッションを進めるために、1社だけではできないことをネットワークを活用するとか。

また、LEDとか環境にやさしい商品の導入に必要なコストの解決法として市民ファンドを活用できないか。

環境と経済の両立のためにどんな事が必要かというキッカケづくりを、いろんなメンバーで仕掛けていかなければいけないのではないかと。SDGsへの取り組み、環境の知識、経済の知識いずれか一方の専門的な知識のみではなく、どちらの知識も得るように考えていかなければいけないのでは。

最後に、何よりこうして4つの班でディスカッションして、いろいろネットワークづくりができたということが、環境と経済の両立のキッカケづくりになったと思われる。

講座報告「大津市でもっと再生可能エネルギーを増やそう！」

12月17日（日）の午後、明日都浜大津5階会議室において、大津で再生可能エネルギーをもっと、増やしていくための講座を開催しました。

まず「住宅用太陽光発電はエネルギー自給自足時代へ」と題して立川博一氏（シャープエネルギーソリューション株式会社）のお話を聴きました。太陽光による発電（電気をつくる）と併せて蓄電池を設置する（電気をためる）ことで、「発電と蓄電のセット」により、割安な電気を賢く使い、自家消費・売電をうまく組み合わせることによって「電気代0円生活をめざそう！」というお話を具体的な数値を示しながら分かりやすく説明していただきました。また発電と節電を自動でコントロールする（電気を賢く使う）HEMS※のことも参考になりました。トータルで家庭の電気をどう節約するかを考える時代になったという印象を受けました。



続いて、株式会社山久の森田基仁氏から「持ち運びもできる、身近で安価な太陽光パネルの活用」と題して、災害時やアウトドアの楽しみにも使えるように、折り畳み式で持ち運びができ、価格も手ごろなパネルの紹介がありました。蓄電池（200Wh）付きで利用できます。展示された現物を参加者の皆さんが興味を持って見ていました。

太陽光発電は再生可能エネルギーの柱になるものですが、併せて節電も重要であり最後に、大津市センターのエネルギープロジェクトリーダーの山和孝氏から「照明LED化による節電効果（家庭の身近な省エネ対策）」の説明があり、電気の上手な使い方、そして地球温暖化防止を考える意義のある講座となりました。

※ HEMSとは、「Home Energy Management System（ホーム エネルギー マネジメント システム）」の略です。家庭で使うエネルギーを節約するための管理システムです。家電や電気設備とつないで、電気やガスなどの使用量をモニター画面などで「見える化」したり、家電機器を「自動制御」したりします。政府は2030年までに全ての住まいにHEMSを設置することを目指しています。

大津市地球温暖化防止活動推進センター（特定非営利活動法人 おおつ環境フォーラム）
〒520-0047 大津市浜大津4-1-1 明日都浜大津4F Tel: 077-526-7545 Fax: 077-526-7581
E-mail: info@otsu.ondanka.net HP: http://otsu.ondanka.net/ 編集責任: 森口 行雄